

万葉のこころ

四季

恋

旅

大浦誠士

絵・水谷桑丘
書・館 鈴峰

万葉のころ 四季・恋・旅

2008年12月16日 初版第1刷発行

2009年 1月19日 第2刷発行

著 者 大浦 誠士

水谷 桑丘(絵) 館 鈴峰(書)

発行者 荒屋 昌夫

発行所 中日新聞社

〒460-8511 名古屋市中区三の丸一丁目6番1号

☎052-201-8811(大代表) ☎052-221-1714(出版開発局直通)

振替 00890-0-10

デザイン 恩田 一弘

印刷所 サンメッセ株式会社

定価はカバーに表示してあります。乱丁、落丁本はお取り替えいたします。

©Seiji Oura, Sokyū Mizutani, Reihou Tachi 2008, Printed in Japan

ISBN978-4-8062-0584-5 C0092

万葉のこころ

四季・恋・旅

工業学院図書館
蔵書章

大浦誠士
絵・水谷桑峰

『万葉集』への誘い^{いざな}

日本の古典文学の中で『万葉集』は『源氏物語』と並んで、最も愛され続けてきた作品の一つです。成立は奈良時代、八世紀のことですから、ざっと今から千二百五十〜千三百年以上前の歌が載せられています。当時中国は唐の時代で、国際色豊かな文化が花開いていましたが、ヨーロッパはフランク王国の時代、イスラム圏はアッバース朝の時代です。アメリカ合衆国は当然存在すらしていませんでした。イギリスでシェイクスピアが多く優れた戯曲を残した時代より九百年も前のことです。そのような時代にあつて、わが国では、もちろん中国の文化の影響を受けながらですが、神話・伝承や歴史が『古事記』『日本書紀』として結実し、そして歌集としての『万葉集』が編まれていたのです。

『万葉集』をひもとくと、そこには様々な人々の「こころ」を垣間見ることができます。大好きな人を何とか恋人にしたいと一生懸命歌を贈る男、大切な大切な弟を失って悲しみに暮れる姉、旅先で故郷に残した妻を思いやる官人、春の訪れを素直な心で喜ぶ人々、最愛の恋人と離れ離れになった歎きを歌う女などなど。はるかな時を隔てた「こころ」は、もちろん現代の私たちの「こころ」とまったく同じはずはありませんが、人の死を悲しみ、叶わぬ恋を歎き、季節の景物を愛で^める「こころ」は、やはり現代の私たちの「こころ」と通じ合う部分が大きいでしょう。もちろん、千三百年前の作者の思いを完全に理解することなどは不可能ですが、はるか昔の歌でありながら、今の私たちが読んでも共感することができる、作者の「こころ」が分かったような気がする、そのことが大切なのだろうと思います。歌という形式は、すべてを述べ尽くすことを許してはくれ

ません。いわば隙間だらけの表現です。しかし、だからこそ、それを享受する人は、時代、地域、階層を超えて、それぞれ自分の感覚でその隙間を埋め、作者の「こころ」を追体験できた幻想を抱くことができるのです。時を超えた共感の世界が成り立つわけです。私は「古典」が読み継がれることの秘密は、そこにあるのだと考えています。

『万葉集』の魅力を一言で言えば「ふところの広さ」にあるといえるでしょう。時代的にも（伝承歌を除けば）舒明天皇のころから奈良時代の中期ころまで、ざっと百五十年ほどの期間の歌がおさめられていて、初期と末期とでは歌がらが全く異なっています。歌人の階層を見ても、天皇や皇子・皇女の歌から、防人歌など民衆の声が垣間見られる歌まで、様々な階層の人々の歌が見られます。また、歌の性格の面でも、格調高い儀礼歌もあれば、宴席での遊びの歌も載せられています。このような『万葉集』の「ふところの広さ」は、『万葉集』二十巻が一度に編纂されたものではないことに由来するのでしょうか。おそらく持統天皇の意向によって、巻一、二の原形部が七〇〇年ころに成立した後、その後の巻が次々と付け加えられ、最後に大伴家持が末四巻（巻十七〜二十）を加えて成立したのが『万葉集』なのです。家で言うなら、増築・改築を繰り返した末に出来上がった奇妙な構造物のようなものです。それゆえ、平安朝以降の勅撰和歌集が整然とした分類や配列をもつて編まれているのと比べると、『万葉集』は様々な歌がごった煮のようにおさまられているのです。悪く言えば雑然としているのですが、それゆえに生まれてくる「厚み」のようなものは、以後の歌集には見られない大きな魅力といえるでしょう。

中日新聞社のご厚意により、平成十八年六月から平成十九年十二月まで一年半にわたって、中日新聞朝刊文化

面「ひととく」のコーナーに、万葉歌の解説を連載する機会を得ました。連載にあたって心がけたのは、先述のような『万葉集』の「ふところの広さ」や「厚み」を伝えたいということでした。そのため、これまでの秀歌選の類にはあまり採られなかった戲笑的な遊びの歌なども積極的に拾い上げて解説を試みました。また、これまで真率な抒情詩として読まれる傾向が強かった万葉歌を、宴などでの座興的な歌として読み替えることに心がけました。これは私の万葉歌観によるものです。どんなに真剣にやり取りされた恋の歌でも、それが集団的な場で披露され、楽しまれるという過程を経なければ『万葉集』という歌集に載ることはないだろうと考えるからです。

連載でもう一つ心がけたのは、これまでの万葉秀歌の類にはあまり採られることのなかった、作者不明の歌をなるべく多く採り上げることでした。平安時代以後の『古今和歌集』などの歌集にも「読み人知らず」の歌は見られますが、作者不明の歌が大量に載せられていることは、『万葉集』の大きな特徴です。それらの歌は、多くの場合、非常に類型的で没個性的な歌なのですが、私はその類型的・没個性的な性格こそ『万葉集』の特徴だと思っています。幼いころに祖父母の影響で「水戸黄門」を見ていた影響か、あるいは父が常に安定した表現を感じるのです。幼いころに祖父母の影響で「水戸黄門」を見ていた影響か、あるいは父が渥美清の寅さんシリーズが大好きだったせいかもしれませんが、毎回お決まりの類型的な表現にこそ魅力を感じるのです。おそらく日本文化の根底には、奇抜を嫌い、無意識のうちに定型の美を求める心性があるのではないのでしょうか。近代以降の文学観の影響で、作者の個性・独自性が強調されてきた万葉歌鑑賞に一石を投じ、これまで埋もれてきた『万葉集』の魅力を再発見するためにも、作者不明の歌になるべくスポットを当て

ようと考えたのです。

今回、ふたたび中日新聞社のご厚意により、連載を刊行する機会を得、編集の方々との話し合いの中で、万葉歌に絵を組み合わせてはどうかということになり、幸いにも水谷桑丘先生そうきゅうに挿絵を引き受けていただくことができました。さらに水谷先生の紹介で、館鈴峰先生による万葉歌の書も加えることができました。水谷先生との打ち合わせの折、俳画も手がけていらつしやる先生から「絵が俳句の説明になつては面白くない、両者が相俟あいまつて一つの作品世界を作り出すところに最大の面白みがある」という旨のお話があり、その通りだと感服しました。そのため、今回の歌と絵のコラボレーションでは、水谷先生に向けた歌の解説は最小限にとどめ、水谷先生の独自の感覚で絵を描いていただくことにしました。歌と絵とが醸たんのうし出す独特の世界も堪能していただければと思います。

歌は本来歌われるものです。本編を読む際には、ぜひとも歌を何回か声に出して読んでみてください。周囲が憚はばかられるような心の中でも結構です。歌が歌われるものだった時代に最も近いところに位置する『万葉集』の歌は、声に出して読んだときにはじめて、その魅力を感じ取ることができます。そして解説によつて歌の内容を把握したら、再び歌を声に出して読んでみてください。本書の主人公は歌なのでから。難しい文法や語法を気にする必要は全くありません。歌の言葉やリズムが醸かもし出す情調を体感する方がずっと大切なことです。私の解説や水谷先生の絵が、その体感の一助となれば幸いに思います。

それでは皆さんを、千三百年の時を超えて『万葉集』の世界へとご案内しましょう。

二〇〇八年十二月

はじめに	2
------	---

第一章 四季の彩り

春	8
夏	28
秋	36
冬	56

第二章 恋すれば

情	64
思	70
嘆・惑	76
想	84
別	92
面影・夢	100
待	106
憂	110

第三章 旅ゆく我は

東海・北陸	118
近畿	126
西国	136
東歌	140

第四章 世のなかは

哀	144
望郷・懷旧	156
宴・遊	166
防人	178
歎・願	182
諸	186

万葉こぼれ話	192
万葉集ミニ事典	210



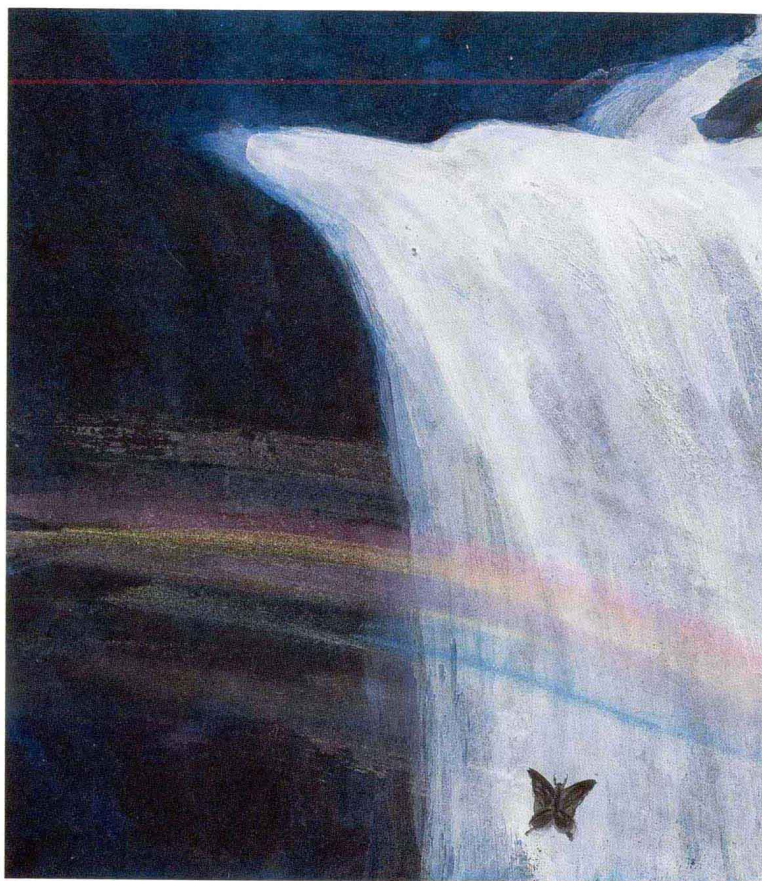
石^{いは}走る^{はし}垂^{たる}水の^み上の^もさわらびの

萌^もえ出^いづる春^{はる}になり^{なり}にける^{ける}かも

志貴皇子

(巻八・四二八)

季節歌を収める巻八の劈頭^{はじ}を飾る志貴皇子^{しきのみこ}の歌。「(石走る)滝のあたりのワラビが萌え出る春になったことだ」。題詞に「懂^{よう}の御歌^{みうた}」と記されており、待ちに待った春が到来した歓び^{よろこび}が、躍動感あふれる一首となつて表現されている。「石走る」とい



う枕詞は、いろいろと説明を
 巡らすよりもはるかに的確
 に、勢いよく流れ落ちる滝の
 情景を喚起する。雪解けの
 水を集めて落ちる滝の「動」
 と、その脇にひっそりと頭を
 もたげたワラビの「静」の組
 み合わせが印象的である。
 志貴皇子は天智天皇の皇子。
 天武皇統の時代、政治的に
 は不遇だったが「志貴」とい
 う名が象徴するかのよう
 に、文芸の面では卓越した才能
 を持ったと見え、万葉集に
 残る六首の歌は、いずれも
 秀逸な作品である。子孫に
 も湯原王・市原王など有名
 歌人が出ている。

いさかたの天の香具山 あめ かぐやま

この夕へ霞たなびく春立つらしも ゆふ かすみ

人麻呂歌集

(巻十二・八二二)

「(ひさかたの)天の香具山にこの夕べ、霞が棚引いている。もう春がやって来たらしいなあ」。人麻呂歌集からの歌。「香具山」は奈良県橿原市の東南。大和三山の二つで、古来神聖な山として「天の」が冠される。それゆえ香具山に棚引く霞は大和の人々に春の到来を確信させる情景だったのだろう。季節の推移を歌いながらも力強い声調の歌である。

春霞流るるなへに はるがすみ

青柳の枝くひ持ちてうぐひす鳴くも あをやなぎ

作者不明

(巻十二・八二二)

「春霞が流れるようにたなびく中で、青柳の枝をくわえて、うぐいすが鳴いているよ」。春の代表的な景物である霞・青柳・うぐいすが組み合わせられる。ただし、枝をくわえたまま鳴くことはできない。現実の情景を詠んだのではなく、正倉院宝物にも見られる花喰鳥の模様のような絵を見て詠んだものだろうが、現実以上に春らしい情景である。作者不明。

うらなびく春立ちぬらし

我が門の柳の末に鶯鳴きつ

作者不明

(卷十二・八一九)

「(うちなびく)春が立つたらしい。私の家の門に植えてある柳の梢で鶯が鳴いた」。柳に鳴く鶯の声によつて春の到来を推測する歌。枕詞「うちなびく」がやわらかな春の雰囲気を感じ出す。柳と鶯の取り合わせは中国詩の影響による観念的な景であり、「春立ちぬ」も暦の知識によると見えるが、繊細な感覚で春を感じ取る心が形象されている。作者不明。

春さればまづ三枝の幸くありて

後にも逢はむな恋ひそ我妹

人麻呂歌集

(卷十二・八九五)

人麻呂歌集から採られた春の相聞歌。「春になるとまず咲く三枝のように、命無事でいて後にくつと逢おう。だから徒に恋しがらないでくれ。私の愛しい人よ」。「三枝」は今のミツマタで、サキの音の繰り返しにより「幸く」を導く序となっている。春になると真っ先に咲く花の生命力と命の無事とが重ねられ、再会の誓いが歌われる。旅立つ男の歌か。

我が園そのに梅の花散る

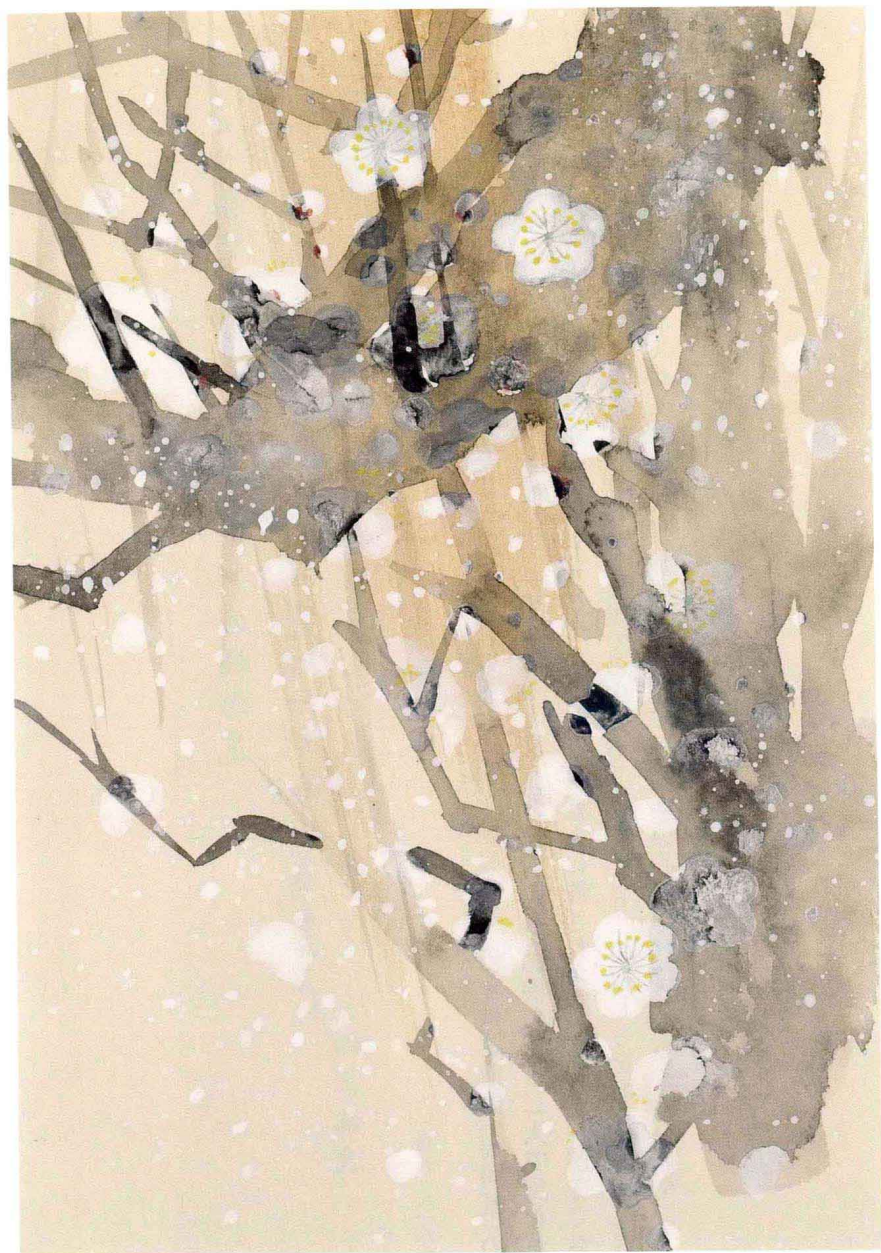
ひさかたの天あめより雪の流れ来るかも

大伴旅人

だざいのそち おおとものたびと

大宰帥大伴旅人は天平二年（七三〇）正月十三日に梅花を愛めでる宴を盛大に催し、参加者は三十二首の梅花歌を詠んだ。この年の正月十三日は立春の日にあたる。今でこそ梅は日本的な植物だが、もともとは中国から渡来した植物で、実を薬用に用いた。それゆえ前期万葉の時代には梅は歌の素材となることがなかった。梅花宴は梅の花を和歌の素材として取り込み、後世に梅がきわめて日本的な景物となつて行く契機として注目される宴である。その宴で主人である旅人自身が詠んだ歌。「私の家の庭に梅の花が散っている。（ひさかたの）天から雪が流れ落ちてくることよ」。庭に散る白梅を降る雪に喩たとえた歌だが、歌の表現そのものを見ると、散る梅の景と降る雪の景が重層して、どちらが実景かわからないような表現法に特徴がある。

（巻五・八三二）



春さればまづ咲くやどの梅の花

ひとり見つつや春日暮らさむ

山上憶良

(巻五・八二八)

おとおものたびと だざいふ
 大伴旅人が大宰府で催した梅花宴ばいかのえんでの山上憶良の歌。憶良は筑前国(福岡県)の
 国司として赴任していた。「春になると真ま先に咲くやどの梅の花を、一人で見なが
 ら私はこの春の日を暮らすのであろうか」。盛大に催された宴で他の人々が皆で春
 の到来を歓び、梅の美しさを愛めでる中であって、「ひとり」の寂しさを歌うのは、大宰
 府の地で妻を喪うしなった大伴旅人になり代わって、その心情を歌ったためと思われる。

春の園紅そのくれなゐにほふ桃の花

下照したでる道に出いで立つをとめ

大伴家持

(卷十九・四三三九)

「春の園の紅色に照り映える桃の花。その下まで照り輝く道に佇む乙女よ」。大伴家持が「桃李とうりの花」(李はスモモ)を見て作った二首の歌の一首目。「桃李」は漢詩文にしばしば詠まれる景物であり、出で立つ乙女も絵画の樹下美人じゆかびじん図を思わせる。実景ではなく詩的感興によつて詠んだ歌か。美を競うかのような桃と佳人の組み合わせが、幻想的な陶酔の境地を演出する。